

文化財News速報

街中の遺跡・町屋四丁目実揚遺跡で
三密を避けて10回目の本調査！



写真1

写真1 溝状遺構、奥に出土した写真3の土師器が見える。コロナ禍でマスクをしながらの作業が続いた。

写真2 検出された井戸跡の断面。

写真3 出土したほぼ完形の土師器。



写真3



写真2

荒川ふるさと文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03 (3807) 9234
登録 (02) 0046号

遺跡からわかる地域の歴史 今回の調査地は町屋四丁目14番付近、都電荒川線の町屋二丁目電停から約500m北に向かった微高地上に位置します。この辺りは住宅街で、弥生時代末から特に古墳時代を中心とした人々の生活の跡が見つかっています。町屋四丁目実揚遺跡は、木枠など囲いが無い素掘りの井戸が多く見つかるのが特徴の一つです。今回も74㎡と狭い面積から井戸が8基も発見されました(写真2)。井戸は出土品から古墳時代後期のもので近世以降のものとは分けることができます。他に、古墳時代前期の溝状遺構が4本検出しています(写真1)。住居の跡は見つかっていませんが、人々の生活の痕跡が分かる遺跡であるといえます。さらに出土品の中からは、今回も東海地方で作られたと思われる土器が見つかっており、遠方から川や海などを使った交易が行われていた可能性が窺えます。

街中の遺跡調査 さて、遺跡調査は土を掘る発掘作業が基本であり、遺跡の出る深さまで掘り進めると、掘り出した土が多量に発生します。立て込んだ住宅街の中では、発掘調査のできる範囲が狭いため、調査区の全体を発掘しようとすると、掘り出した土の山で身動きが取れなくなります。そのため、調査地を分割して少しずつ調査を進めていきました。

コロナ禍の下で 調査は令和2年4月27日から5月29日まで行われました。新型コロナウイルスの影響により外出の自粛、学校の休み、仕事のテレワーク推奨の時期と重なりました。そうした状況下で調査は三密を避けながら、粛々と進められ、通行人に出土した土器(土師器)を距離を保ち見てもらったことも(写真3)。古くは一八〇〇年ぐらい前の時代で、近くの区立町屋第二児童遊園(町屋四丁目3番10号)には「町屋四丁目実揚遺跡」の史跡文化財説明板が設置してあります、と説明すると、皆さんそんなに古いものなの!と驚いた様子でした。現在、整理作業を行っています。調査の成果は、令和3年に報告書を発行予定です。

〈八代和香子〉



写真1 鈴木金平画「荒川風景」

描かれたあらかわの景色

鈴木金平が描いた「荒川風景」

1

この夏、風景画に描かれた工場場所を知りたい、というお問合せをいただきました。「荒川風景」というタイトルから、荒川区ではないかと推測し、連絡をくださったそうです。

画家・鈴木金平 「荒川風景」の舞台探しを始める前に、作者についてご紹介しましょう。この絵の作者は洋画家の鈴木金平（一八九六一一九七八）。三重県四日市市出身で、白馬会洋画研究所に学び、兄の友人の岸田劉生の弟子となりました。その後、中村彝（なかにし）に出会い、傾倒し、ルノワール調の人物画・静物画を描くようになります。太平洋画会展、帝展、光風会展等に出品し、戦後は旺玄社会員として明るい色彩とナイーヴな画風の作品を発表。昭和38年（一九六三）に発表した「荒川風景」はこの時期の作品です。また、師である中村彝の遺稿集「藝術の無限感」（一九二六年）の編纂、画集の出版に尽力し、高い評価を受けています。

鈴木金平の活動とあらかわ 作者とあらかわは、意外なところで繋がりがありません。一つは、大正15年（一九二六）に出品した太平洋画会展です。太平洋画会とは、諏方神社（西日暮里三丁目）の近くに拠点を置く太平洋美術会の昔の名称です。この時、同14年に亡くなった彝を記念した中村賞を受賞しています。もう一つが、本行寺（西日暮里三丁目）で行われていた岡田式静坐会です。鈴木金平は、大正4年にここで中村彝と知りあったと言います。この会は、岡田虎二郎によって創始された心身修養法で、多くの政財界

人・芸術家たちが参加していました。この頃、日暮里渡辺町（西日暮里四丁目）の宅地開発が行われ、日暮里は芸術家たちが集う街として知られていました。この時期に、鈴木金平はあらかわに足を運んでいたのです。

「荒川風景」の舞台 さて「荒川風景」に戻りましょう。「荒川」という地名を聞くと、足立区を流れている巨大な堤防のある「荒川」を思い浮かべることがでしょうが、あの川は人工河川の「荒川放水路」。昭和40年の建設省令で、放水路は「荒川」の命名を受けたのです。ですから、この絵が描かれた昭和38年の段階では、当区の周りを流れている川が「荒川」でした。では、この工場は？改めて絵を眺めると複数の建物と煙突が描かれています。また荒川沿いの昔の写真と比較すると、煙突と白い建物がある工場の存在に気づきます。尾久の旭電化です。大正時代創業の化学工場は、戦後もあらかわの産業の主軸をなし、川辺の景観をなす存在でした。鈴木金平の目に止まったとしても不思議ないでしょう。しかし、絵画は写真ではありません。あくまでも候補の一つにとどめましょう。「荒川風景」は近代のあらかわで活動した画家・鈴木金平が思い出の地に導いてくれたものかもしれません。（野尻かおる）

【参考文献】「鈴木金平遺作展」（一九九一年）

※「荒川風景」が、鈴木金平の肖像画と共に、金平の長男・鈴木男浪氏のご遺族の鈴木崇子氏、中村敬人氏から寄贈されることになりました。ご厚意に感謝いたします。

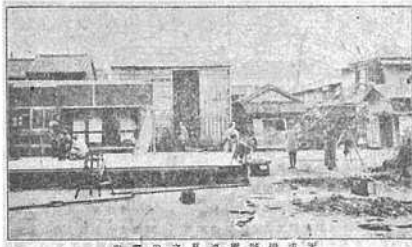


写真1「天活撮影所道具立の際中」(『活動之世界』3-12,1918年〈国立国会図書館蔵〉)



写真2 日暮里撮影所舞台撮影の光景 (同上)

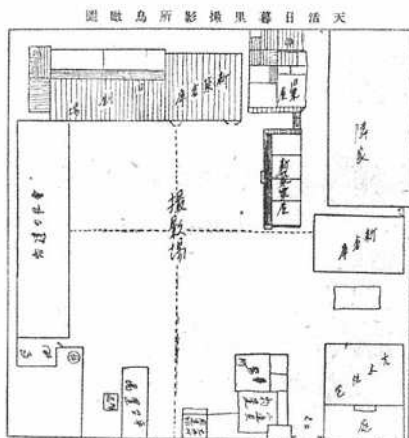


図1 天活日暮里撮影所鳥観図 (同上)

野外に舞台、舞台の前は広々としている。周囲の家屋は2階建てで空は広い(写真1)。ここは天活(天然活動写真株式会社)の日暮里撮影所。舞台は映画のセットだ。現在の東日暮里六丁目44辺りにあった。当時は長屋とぬかるんだ道の中であり、高い板塀に囲われていた。300坪余のこの敷地は、中心部を撮影所として空け、その周囲を倉庫や事務所、小道具置場、楽屋などが囲んでいた(図1)。

日暮里撮影所沿革 日暮里撮影所は元々は大正元年(一九一二)に創立した常盤商會が、同じく日暮里にあった福宝堂の花見寺撮影所(西日暮里三丁目)から人員を引き継ぎ設立された。同3年、天活が常盤商會を吸収し、撮影所も引き継がれ、撮影は続けられた。写真2では、袴等の着物を着た役者らが何やら打合

百写真の中の歴史世界⑤ 天活日暮里撮影所 —あるいは澤村四郎五郎と松本源之助—

影は朝5時頃から日が暮れるまで、雨さえ降らなければ毎日撮影で、山は秩父方面へ、海は江の島から逗子、大洗、銚子、房総沿岸へ出かけ

せをしているが、日暮里撮影所は、旧派、つまり時代劇の撮影所だった。ところが、日暮里撮影所はたった7年余で幕を閉じる。「東京朝日新聞」大正8年3月18日号によると、隣の敷地に住んでいた天活社員宅から出火し、撮影用具も含めて全棟が全焼。周囲の民家にも延焼し、約30戸余が全半焼する大火になった。同日付の読売新聞は、フィルムから引火したのではないかとしている。かくて、現在の豊島区西巢鴨四丁目天活の撮影所が新設され、日暮里に映画撮影所があった時代は幕を閉じた。

撮影の様子 当時は無声映画の時代だが、天活は撮影技術に定評があった。忍術演出などで、日活の尾上松之助と並ぶ人気を誇った澤村四郎五郎によると、撮

て行ったという(澤村四郎五郎「日暮里撮影所にて」(『活動画報』1-10、一九一七年)。なぜそんなに忙しかったのか? 当時の映画館は10日ごとに新作をかけなければならず、配給する映画館が多いほど、回していくために次々と映画を制作していかななくてはならなかったのだ。

実際の撮影は、天井のないオープンセットで行われているが(写真2)、北側の倉庫前の屋根に、大きなテントがしまつてあって、綱を引くと全撮影所を覆うことができたという(編集局「天活日暮里旧派撮影所」(『活動之世界』3-12、一九一八年)。少々の雨なら撮影するための工夫だろう。

無声映画と里神楽 ところで澤村四郎五郎には、澤村四郎五郎という弟子がいた。実はこの人、江戸里神楽の三代目松本源之助。「色々と教わって」、依頼があれば、「芝居をやっていた」。よって「昔の神楽師は御神楽をやっても皆芝居心があったので、良いものができた」という(松本源之助「面芝居あれこれ」(『神楽の面芝居』、国立劇場、一九七五年)。どのようにして弟子になったのか不明だが、松本家の住まいは日暮里撮影所に近い西日暮里六丁目にある。もしかするとそこから何らかの縁が生まれた可能性はある。ともあれ松本社中の里神楽には、無声映画時代の活動写真の芝居の風味が溶け合っていると見えるのかもしれない。

(亀川泰照)

【主な参考文献】 田中純一郎「日本映画発達史」I(中公文庫、一九七五年)、八木橋伸治「日暮里の撮影所」(『日暮里の民俗』、一九九七年)

収蔵庫のイッピン!

十一冊目

『日本国勢調査記念録』

— 百年前の国勢調査の調査員たち —



写真1 『日本国勢調査記念録 (東京府)』第三巻

職業	人数	兼任役職
農業	10	町会議員、 在郷軍人分会 幹事、 青年団支部長、 青木委員、 学務委員
肩物商	12	町会議員、 在郷軍人分会 幹事
古綿商 織物製造業 毛織物原料商	各1 (計4)	
株式会社関東消毒所社長 差配業	4	
酒類業、材木商、 不明	各3 (計9)	
洋服商、米穀商	各2 (計4)	在郷軍人分会 幹事
郵便局長、銀行支店長、 町会議員、医者、土地 家屋管理、鐵工業経営、 甲馳製造業、ペーパー 製造業、金属・雑貨製造、 菜種商、牛肉商、菓子商、 乾物商、植木職	各1 (計14)	町会議員、 教育会評議員

表1 日暮里町の調査員の内訳

件のもと、非常勤の国家公務員として任命された名誉ある職務であった。調査員にみる百年前の日暮里町そこで寄贈者の祖父が調査をした北豊島郡日暮里町に焦点を当て、調査員たちの特徴から

今年は国勢調査、百周年！ 皆さんは今年行われている国勢調査の歴史をご存知だろうか。今年は大正9年（一九二〇）に初めて行われた調査から21回目で、なんと百周年にあたる。国勢調査とは、日本に居住しているすべての人及び世帯を対象として5年に一度実施され、政治・行政や民間企業・研究機関に広く利用されている国の最も重要かつ基本的な統計調査である。

その記念すべき第1回国勢調査を記念して編まれた『日本国勢調査記念録』全3巻（大正11年、日本国勢調査記念出版協会発行）を西日暮

里の村田常彦さんから寄贈いただいた（写真1）。第1回国勢調査の調査員を務めた村田さんの祖父・春太郎氏へ配布された記念録は、強制疎開で持ち出されて戦火を逃れ、国勢調査百周年の節目に当館へ寄贈されるに至ったのである。

記念録が語ること 記念録は第1巻に調査の歴史・概要、第2巻に調査報告・美談逸話、第3巻に調査員の写真・経歴が記され、凡例には「我が国空前の一大文化的事業」である第1回国勢調査を後世へ伝えるために作られたとある。中でも、第3巻は道府県毎に作成されており、地区毎に調査員が掲載された。

では、この大規模な調査は誰が行うのか。令和2年の調査では公募で候補者を集め、地区町村に推薦され、都道府県知事により地方公務員に任命された者が調査員を担う。一方、第1回国勢調査は町内会役員、小学校教員などが「文字を解し、事理に通じ、名誉ある者」という条件のもと、非常勤

の国家公務員として任命された名誉ある職務であった。調査員にみる百年前の日暮里町そこで寄贈者の祖父が調査をした北豊島郡日暮里町に焦点を当て、調査員たちの特徴から

当時の町の様子を見てみたい。日暮里町は明治年間に鉄道や道路が敷設され、近世以来のムラから一転、工場が立ち並びまちへと近代化の一途を進んでいた。その諸相は、調査員57名のうち約17%が農業、残り83%が商工他に従事という調査員の職業等の内訳から読み取れる（表1）。さらに細かく見れば、農業とほぼ同数の12名を数える「肩物商」（内2名は「ウエス業」と明記）経営者たちの存在が特徴的だ。ウエス業は工業用油をふき取る布を製造するリサイクル産業、いわゆる再生資源回収業で、現在も日暮里の代表的な産業の一つである。

農村として発展してきた日暮里町において、一番多く調査員として従事していたのが、新興産業である肩物商たちであったのは興味深い。そして、彼らも農業従事者と同様に、町会議員、在郷軍人会の幹部といった地域の要職を務めている。記念録は、地域の新興産業の担い手である経営者たちが、経済的・政治的に地域を発展させたことを示す貴重な資料といえよう。

百年前に調査員たちが調べた地域の情報は国民生活の礎となり、今となっては彼らそのものが当時の地域の様子を物語っている。次の百年、どのような人々が、地域の姿を伝えていくのだろうか。

〈岡田伊代〉

【参考文献】『荒川区史』（一九八九年）、『日暮里の民俗』（一九九七年）、統計局ホームページ「国勢調査100年のあゆみ」

※資料寄贈並びにご教示いただきました村田常彦氏にお礼申し上げます。

文化財NEWS 続報

荒川遊園煉瓦塀整備事業 — 新たな見学スポットの登場 —



写真1 見学スポット（地面がタイルの部分）
※タイル部分以外は小台橋保育園の敷地です。見学の際は、タイル部分以外の敷地には立ち入らないようご注意ください。

荒川遊園煉瓦塀
この煉瓦塀は、荒川遊園開園の際に敷かれた門柱の跡と、煉瓦の小屋を見守る手摺り口壁を、長年を耐え抜いてきた。一段おきに煉瓦とレンガの二層構造を有し、江戸時代末から明治にかけての建築様式を反映している。昭和11年（一九二二）の荒川遊園開園の際に、この煉瓦塀は、煉瓦の小屋を見守る手摺り口壁として、煉瓦とレンガの二層構造を有し、江戸時代末から明治にかけての建築様式を反映している。昭和11年（一九二二）の荒川遊園開園の際に、この煉瓦塀は、煉瓦の小屋を見守る手摺り口壁として、煉瓦とレンガの二層構造を有し、江戸時代末から明治にかけての建築様式を反映している。

右側台むす 荒川ふるさと文化館 TEL. 03-3807-0234

写真2 説明板



写真3 補修工事で地中の土台を補強

見学スポットと説明板の設置 荒川遊園の東、小台橋保育園に隣接する「荒川遊園煉瓦塀」（西尾久六丁目20）は、平成30年度荒川区登録有形文化財となりました。

区では、令和2年3月、この煉瓦塀の保存のための補修を行い、その歴史と文化的価値について理解を深めてもらうため、見学スポット（写真1）を整備し、説明板（写真2）を設置しました。

見学スポット整備前は、旧小台橋保育園舎と隣接する住宅地との狭間にあり、かろうじて南端の門柱付近だけ見ることができた状態でした。今回、小台橋保育園の御協力により、新設された園舎と煉瓦塀との間に小さな広場（見学スポット）を設け、北に続く煉瓦塀が見渡せるようにしました。

説明板では、尾久が煉瓦塀のある景観で知られるようになった経緯を知ることができます。大正11年（一九二二）の荒川遊園開園の頃に建造されたと推定される煉瓦塀の構造上の特色はもちろん、尾久の煉瓦工場の跡地に開園した荒川遊園、戦時中に軍の接収による閉園を経て、戦後に区立遊園地として再開し、一部は煉瓦塀を残したまま宅地化されて今に至る歩みを紹介

していません。

補修工事 この煉瓦塀は大正、昭和、平成、令和という四つの時代を経る中で、関東大震災や東日本大震災といった大地震でも倒壊することなく時代の波を乗り越えてきました。しかし、そんな丈夫な塀も建造からまもなく百年。安全性を高め、後世に残すため、補修工事を実施しました。

工事にあたっては、細心の注意を払いながら、地中の土台部分の補強のために鉄筋コンクリートで基礎固めし、塀内部には鉄筋を挿入、表面のヒビには樹脂等を注入するなど、外観に影響を与えないように補修に努め、しっかりと補強を行いました（写真3）。

荒川遊園付近を訪れた際には、是非、煉瓦の風合いが映える尾久の風景をお楽しみください。

〈澤田善明〉

訃報

●荒川区指定無形文化財（工芸技術・人形頭）保持者、高久秀芳氏（享年87、西日暮里）は、去る令和2年4月25日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。